Joseph Addison の文学批評の原理

（註1）

野村　武

１７世紀末から、１８世紀初頭にかけての英国の文学批評家を評して、Addison は、*Tatler* 誌１６５号に於て、次の様に述べている。「この浅はかな種族の中で、一般に批評家の名で知られている者程、うるさく、中味はからつぼで、うぬぼれの強い動物はない。普通に受け取られている意味では、批評家とは、作家のsense and soulに立ち入ることなく、二、三の一般的な規則を、機械道具の如くにあらゆる作家の作品に適用し、作品が、規則に合つているか否かによつて、作家を、完全だとか、欠点がありとかと断言する者である。……批評家のそれと知れる特徴として、彼の目はつり上り、額は、独断家的であり、その口調は、自信に満ちあふれ、彼は、読んだことがあろうとなかろうと、出版されるものは、何でも軽べつするのである。彼の論ずるのは、全く、一般的なことばかりであるし、その賞讃や、非難は、大ざつぱである。彼のHomer や Horace や Virgil に対する判断は、これらの作家の作品自身に基いているのでなく、Rapin や Bossuの作品に基いているのである。彼は、身の程をよく承知しているので、仏国の作家をその保証人としないでは、何物をも賞讃する勇気がないのである。」斯様に、Addisonは、当時の批評家を痛烈に非難した。Addison の上述の言葉からも察せられるように、理論の作品への適用よりも、理論そのものを重視した彼等の批評は、作品の個々の美や欠点に触れることが少なく、概括的であり、古典の規則を尊重し、これを批評の基準として、兎角、fault-finding criticism に堕し易かつた。善意と寛大さとを標榜したAddison が、批評家を評して“animal”と罵倒したことによつても察せられるが如く、当時の批

評家達は、学を衒い、悪意と妬嫉に満ち、作品のあら探しを、専らの任務とする者と、一般に、見做されていたのであつた（註２）。Addison は、斯様なfault-finding criticism に反対した。完全な人間がこの世に存在し得ない如く、完全な作品も存在し得ないと考えた彼は（註３）、真の批評家の任務は、瑣細な欠点を見逃し、作品の中に埋もれている美を見出し、これを世間に伝えることにありとした（註４）。美の発見－これが彼の批評家としての重要な立場であり、Milton 論、Ballad 論等は、この理論を実行に移したものであつた。それでは、Addison の言う、文学作品の中の beauty とか"sense and soul of poetry"とは何であろうか。

１６９３年、２３才の時、Addison は、Virgil の*Georgics* に関する批評を書いた。その中で、彼が、大略次の如く述べている個所がある。「教訓詩と云うのは、感覚的な世界から遊離しているので、詩の"spirit and life"である"beautiful descriptions and images"を読者に与えることは、少ないのであるが、『農耕詩』の美しい自然描写は、読者の想像に働きかけ、これを動かして、その心中に、様々な、楽しい光景を展開させる（註5）。」　こゝでは、彼は詩の真髄は、読者の想像に訴える美しい自然描写だと考えた。この想像への訴えを、詩の重要な要素とする彼の考え方は、*Tatler* 誌、*Spectator* 誌を通じて変らなかつたと見てよい。彼のこの考えが、最も明瞭に表わされているのは"taste"を論じた *Spectator* 誌４０９号に於てゞある。次の如くに彼は言つている。「鑑賞眼を殆ど持たぬ人でも論ずることができる機械的な規則の他に、優れた作品の真髄そのものに立ち入つて、良い作品に接する時、心中に生ずる喜びの源を示してくれる様な作家がいてくれたらと願わずには居られない。かくして、詩に於ける、三一致の規則とか、これと同種の点が、完全に説明され、理解されると云うことが、絶対的に必要であるかも知れないが、しかし、Longinus

を除いては、気づいた批評家が少ない，詩にとつてより本質的な何か、想像を高め、これを驚かせ、読む者に、心の偉大さを与える何物かゞある。」ここに明らかなように、Addison は、規則を超越し、想像に働きかけ、これを高めるものを詩の真髄と考えた。彼は、このよつて来たる源を、the great the beautiful, the noble とし、これらについて、想像論の中で論じたのである。

Addison は、*Spectator* 誌291号に於て、規則に抱泥し、これを厳守して書く作家の作品よりも、手落ちはあるが、偉大な"genius"の作品の方が望ましいと述べ、又、同誌592号に於ても、規則を厳守する小天才の作品の中よりもこれを知らぬ大 天才の作品の中により多くの美が存在していることを強調している。ここで我々は、彼が *Spectator* 誌160号に於て述べている genius 論に触れねばならない。Addison は天才を二種類に分けた。第一群の天才は、彼が"natural genius"と呼ぶもので、学識や技巧の助けを借りないで、全くその天賦の才によつて創作する作家で、その作品の中には、"something nobly wild and extravagant" なものがありとし、Addison は、この群の天才の才能を、整然とした秩序なく、花が乱れ咲き、美しい光景を展開する、良い気候の下の、豊かな土地にたとえる。この群にはHomer; Pindar, Shakespeare が入る。第二群の天才は、彼等の偉大な天賦の才能を、技巧によつて、制限、修正し、規則によつて、自らを作り上げて行く作家である。
たとえて見れば、その才能は、第一群の天才のそれと同様、良き気候の下の、豊かな土地ではあるが、芝生が植えられ、散歩道が敷かれ、庭師によつて、秩序よく整理されている点で、異つている。この第二群の天才の陥り易い弊害は彼等が、その生れついた能力を充分、発揮することなく、これを、過度に、模倣によつて、制限し、手本によつて自らを作り上げることである。Addison は、第二群の天才にPlato, Milton 等を入れている。彼は、この二種類

の天才に、優劣の差はないと云つている。しかし、Addison が、この天才論の中で、偉大な作家に必要な条件として、その作家に固有な、表現形式や、考え方をあげて、作家の独創性や、個性を強調し、又、*Spectator* 誌 413 号に於て、人為的な庭園より、自然のまゝの庭園を好んだこと等から考えて、Addisonは、第一群の"natural genius"をより好んだと察して良いであろう。

上述の如くに、Addisonは、批評家の任務は、規則を厳守し、これに従う作家の作品の中よりも、規則を知らぬ、又、これを破る天才の作品の中に多く見られる想像に訴える美を見出し、これを世間に伝えるこにあると考えたのである。それでは、批評家は、読者は、如何にして、この美を認め、味わうことができるであろうか。批評の基準は、何であろうか。

既に、見て来た様に、Addison は *Tatler* 誌１６５号で、規則を作品批評の基準とする批評家を非難し、規則に抱泥する作家よりも、これを守らぬ天才をより好んだ。彼の規則に関する考えが、最もはつきり表わされているのは、*Spectator* 誌５９２号である。同号は、まとまつたものとしては、彼の批評理論が書かれてある最終的な号であり、又、内容的にも、その集大成と見做してよいものであるが、こゝで、彼は、規則に関連させつゝ、Shakespeare を論じて次の様に述べている。「批評家達は、芸術の規則を知り、これを守る小天才の作品の中よりも、これを知らない大天才の作品の中に、より多くの美があると云うことを知らない様に思われる。我々の類なきShakespeare は、これらの総ての厳格な批評家にとつては、躓きの石である。劇に関する規則の一つだに、破られていない当今の批評家達の作品よりも、規則の一つだに守られていない彼の劇を読もうとしない者があるであろうか。まことに、Shakespeare は、詩のあらゆる種子を宿して生れつき、Plinyが我々に語るがごとく、技巧の助けを借りずして、自然の自発的な手によつて産み出された、その紋里に、Apollo と、九詩神の像をきざまれたPyrrhus

の宝石にたとえられよう。」又、彼は、*Spectator* 誌279号に於て、Shakespeare の才能の偉大さが示されているのは、伝説や歴史に基いているHotspur や Caesar の描写よりも、全く彼の想像力の産物であるCaliban の描写であると述べている。又、同誌418号では、Dryden が"fairy way of writing"と呼んだ魔女や、亡霊の描写に於ては、Shakespeare が卓越していると言つている。斯様に、技巧を借りない、自然の天才であるとし、この劇作家の偉大さを、その想像の豊かさにあると考えたAddison は、規則による批評は、Shakespeare の偉大さを鑑賞できないものとし、規則をあてはめんとする批評家には、彼は躓きの石であると断言したのである。

Addison の好んで使用する言葉に、"common sense"や"good sense"がある。*Tatler* 誌158号に於て、批評家や註釈者を評して、彼等は、学があるが、"common sense"に欠けていると彼は言つて居る。又、*Spectator* 誌165号に於ては、三一致の法則が喜劇に於て守られていないといつて憤慨するSir Timothy なる人物を、喜劇の目的は、楽しませることであり、規則の守られた劇が受けた例を知らないと云つて嘲笑している婦人を評して、"natural sense"が彼女を千の批評家よりも、より良き判断者たらしめていると述べている。更に、*Spectator* 誌13号に於ては、当時の劇の観客の趣味の低俗さに言及して、我々の悲しむべきは、彼等に"good taste"が欠けていることより、"common sense"が欠けていることだと述べている(註6)。"common sense"と言う言葉は、我我に、これを重視したRymer の批評を連想させるかも知れない。しかし、Addison の"common sense"は、もつと広い意味を持つものであつた。それは、物事の善悪や、真実と外見を識別し、異常な風俗習慣を改ためんとする判断の能力であつた。Rymer の"common sense"は、理性と、古典の規範を重んじ、Shakespeare や Milton の偉大さを解さ

なかつた。Addison の“common sense”は、当時の風俗習慣を是正し、モラルを高め、ばかげた舞台上の装置や扮装を、改正しようとしたのである。

規則や常識の代りに、Addison は、作品の美を味わい、評価するのは“taste”であると考えた。彼のtaste論は、*Spectator* 誌409号に詳しい。彼の定義に依れば、“taste”とは、「喜びを以つて作品の美を、不快の念を以つて、その欠点を認める心の能力である。」洗練されたこの審美眼を有する人は、作家の一般的な美や、欠点を認めるのみでなく、その作家固有の表現法や考え方を認め得る。この能力は、ある程度、生得的のものではあるが、常に磨き上げられて行かねばならない。古典に通ずること、洗練された天才との会話、現代古代の批評家に親しむことなどがその方法である。読者がこの能力を所有しているか否かを試してみる方法がある。種々の時代や国々のテストに耐え、現代に伝わる古典や、古典や仏国の批評家に通じている現代の学問ある人々によつて是認されている現代の作品を読んで、感動されるかどうか。作家の特徴を味わうことができるか否か等がそれである。これがAddison のtaste論の大略である。

彼は、この号を結ぶに当つて、「私は、この土曜日から、“想像の喜び”についての試論に取りかゝる。それは、この問題を概括的に取り扱かうであろうが、詩と散文に於ける優れた作家の章句に美を与えるものは、何であるかを、読者に示唆するであろう。」と述べている。Addison の想像論は、詩の美は想像への訴えであるとし，その源を、the great，the beautiful，the nobleに求め、これらが生み出す想像の喜びの原因等を調べ、詩の創作と鑑賞に於ける想像の重要さを説いたものである。Addisonの“taste”は、換言すれば、これら三つの詩の中の想像へ訴える要素を、認め味わう能力と云つてよいであろう。

以上、我々はAddison の文学批評の理論を概観して来た。所謂、擬古典主義の名で呼ばれる彼の時代の文学批評がそうであつたようにAddison の批評の理論と実際も、その中に、古いものと同時に、新しい批評の崩芽を宿していた。

詩にとつて本質的なもの、想像へ訴える要素を強調し、作家の個性と独創性を重んじ、古典の規則を批評の基準とすることを否定したAddison であつたけれども、彼のMilton 論の前半は、仏国批評家の叙事詩論を適用したものと云われ、Ballad 論は、常に古典への引照のもとに、なされている。

しかし、Addison 自身が、*Spectator* 誌74号で表明している如く、当時、殆んど関心を持たれず、価値を認められていなかつたballad を公けに批評にするには、古典をその保証とすることが、必要であつた。古典や、仏国の文学や、批評は、殆んど、偶像視されていた。古典への引照や、仏国の文学批評論の適用は、彼の批評を民衆に理解させるために、Addison が、止むを得ずとらねばならなかつた妥協の手段であつて、彼の本心から出たものではなかつたであろう。図式的に整理された人為的な当時の英国の庭園よりも、自然のまゝの中国風の庭園をAddison は好んだ(註7)。*Remarks on Italy* の随所に見られるアルプスの奇景を嘆賞する文章は、彼が自然の美、しかも、単調な、画一的な自然美でなく、荒々しい畸形美を味わつたことを示している。しかし、彼は、ゴチツク建築の美を解さなかつた(註8)。彼が論じた imagination は、picture-making faculty を意味する場合が多く、視覚がよび起す想像に限定されていた。しかし、彼は、Caliban や、魔女、幽霊の描写を賞讃したことからも察せられる様に、Shakespeare の想像の豊かさと独創性を強調した。Addison にとつては、Shakespeare は"躓きの石"ではなかつた。

Addison の文学批評は、妥協と、古い要素の含まれたものであつたが、全体としては、擬古典主義的な批評を脱して、新しい批評への息吹を多く持つた批評であるように思われる。就中、彼の批評家としての最大の功績の一つは、beauty-finding criticism を旨として、邪道にあり、白眼視されていた当時の批評を、正道にのせ、偉大な文学を、民衆の間に普及させるのにあづかつて大いに力があつたことであらう。

（註）

1. この小文は、私の修士論文の中の、Addison の文学批評家としての立場、理論に関する部分を紹介したものである。
2. *Cf. The Critical Works of John Dennis*, ed. by E.N.Hooker, I, liv.
3. *Guardian*, 110.
4. *Spectator*, 291, 262.
5. *The Works of Joseph Addison*, Bohn's Library, I, 155.
6. *Cf.* also *Spectator*, 5, 105, 240.
7. *Spectator*, 413, 477.
8. *Ibid.*, 415.